

Title	独我論と普遍性の構造：構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(2)
Author	福島, 祥行
Citation	人文研究. 57 卷, p.165-180.
Issue Date	2006-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	藪木榮夫教授：広川禎秀教授：阪口弘之教授：小西嘉幸教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

独我論と普遍性の構造⁰⁾ —構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(2)—

福島 祥 行

これまでのコミュニケーション・モデルは、基本的に、コミュニケーション（発話）開始前に、話し手にしかアクセス不可能な前言語段階を認めており、それが聞き手に共有されるためのシステムを提案してきた。そのような前言語段階は他者には知りえない「私的言語」であり、それを認める立場は、社会的相互行為以前から存在するもの、すなわち「本質」を要請する本質主義である。社会的相互行為によって公的に顕在化させられる以前には、ことばの「意味」はもちろん、視覚をはじめとする「知覚」すらもありえないとする構築主義的立場からすれば、すべてに先だつ存在を要請する本質主義や、いかなるケースにも妥当する時空間を超越した存在を要請する普遍主義は容認されないが、われわれの実感としては「普遍的真理」の存在は否みにくい。本小論では、そのような「普遍的真理」の存在を認めたくえて、その構造を分析し、そのような「普遍的真理」も、時空間パラメータを導入することにより、構築主義的観点からも矛盾なく説明されることを論じる。あわせて、時間パラメータをそなえた動的なコミュニケーション・モデルも提示した。

0 コミュニケーションの不可能性

かの18世紀書翰体小説『危険な関係』*Les Liaisons dangereuses* において、物語のかなめに位置するメルトウイユ侯爵夫人は、共犯関係にあるヴァルモン子爵にはもちろんのこと、いわば生贄であるセシルにたいしても、「手紙には本心を書くべきではない」ことを教えさす。彼女にとって、「手紙を書くこと」は、手紙の受信者にむけた「術」の一種なのだ。そしてこのことは、裏をかえせば、「なにもしなければ、手紙には本心があらわれてしまう」ことを意味している。たしかに、ことばは「心のうち」をあらわにする。

メルトウイユ侯爵夫人が「本心を書くべきではない」というとき、彼女が、「本心」と、それをあらわすものとしての「ことば」とを前提しているのはあきらかだ。「ことば」以前に「心」が存在する。けれどもそのとき、「心」とはなんであるか？ 「現動化」actualiséされず、「潜在的」virtuel な状態にとどまっている、「前記号的ことば」なのであろうか。もし、メルトウイユ侯爵夫人が、みずからの本心を、かくかくしかじかと語りうるようなものとして「意識」しているのなら、それはやはり「ことば」であろう。そして、そのことばは「胸のうち」に隠されており、他人には窺い知ることができない。そもそも窺い知れては「本心」ではなくなってしまうからだ。

他人には知りようのない、そのひとだけのことばを「私的言語」langage intimeという。

そして、じぶんのみの世界において、他者と無関係に——すなわち、「公の場」にさきだって——ものが成立するということは、個人をとりまく状況やコンテキストにかかわらず不変の要素の存在をみとめるということであり、ひいては、絶対不変／普遍の真理を前提とする「本質主義」essentialismeを容認することになる。だが、言語の社会的性質にしたがえば、私的言語はありえず、本質主義も否定される。にもかかわらず、われわれは、ことばの前の「本心」の存在や、時空間を超越した「絶対不変／普遍の真理」の存在を否定しってしまうことに違和感をおぼえる。それはなぜか？

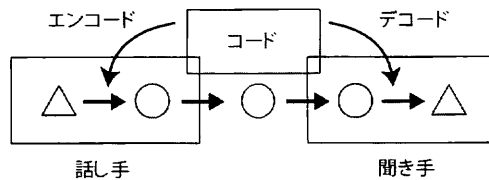
この小論では、這般の消息をめくり、構築主義と本質主義の理論的統合について考察したい。

1 コミュニケーション・モデルと独我論

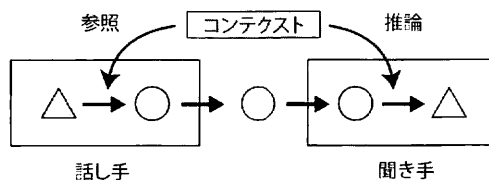
1-1 ふたつのコミュニケーション・モデル

福島（2000）でのべたように、従来、コミュニケーションを論じるさいにもちだされる典型的なコミュニケーション・モデルは、「コード・モデル」と「推論モデル」であった¹⁾。いずれも、「コミュニケーション」というものを「メッセージの発信－受信システム」とみなしたうえで、前者は発信者－受信者間に「共有されたコード」を前提し、後者はそのようなものを否定する。その結果、前者におけるコミュニケーションの基本は、発信者によるメッセージのエンコードと受信者による復元となり、後者においては、受信者の「推論」による発信者のメッセージの再構築ということになる。はなはだ単純化して描けば、つぎの図式ようになるであろう。

(1) コード・モデル



(2) 推論モデル

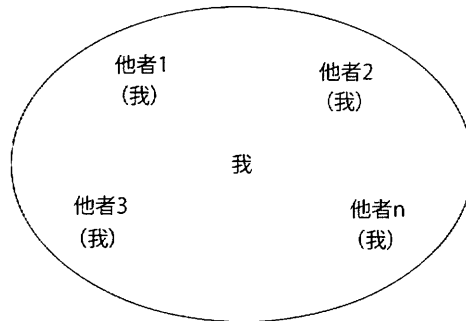


(1)(2)において、△はいわば「前言語的心象」、○は「記号」である。コード・モデルでは、話し手が△をコードにもとづいて○に変換し、それを聞き手が共通のコードにしたがって復元する。推論モデルでは、話し手はその場の状況等のコンテキストにもとづいて△を○にし、聞き手はやはりコンテキストを参照して△を再構築する。

1-2 ふたつの独我論モデル

さて、われわれが生きているこの世界は、われわれが認知するようになっている（はずである）。しかしながら、われわれの「世界」——たとえば、電車に乗っていて、目の前にはさまざまなひとびとが坐っており、右隣では主婦たちが、左隣ではカップルがなにやらさざめきあっている、といったようなものは、いうまでもなく、われわれの視覚や聴覚が脳生理学上の奥妙な作用の結果つくりあげたものである。したがって、われわれの「世界」は——それを認知する脳そのものもふくめ——ことごとく、「脳のなか」にあるともいいうる。「世界」は「我」の内部に存在するのであり、その世界に登場している「他者」もまた、じつはすべて「我」の内部にあるということになる。これはつまり、「独我論」 solipsisme とよばれる世界観にほかならない。すなわち、以下のごとき図式である。

(3) 独我論A

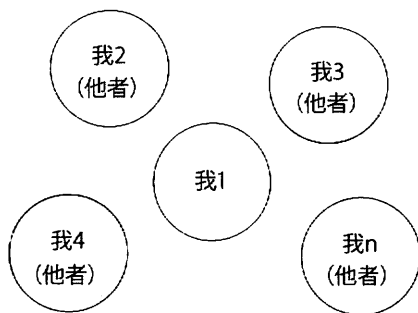


この世界においては、他人の「心のなかで考えているメッセージ」が、あたかも自分のもののごとくに諒解できる。なぜなら、ここにおける「他人」は、「自分」の脳裡に存在する表象だからだ。したがって、他人の「ことばの意味」はもちろん、「見え方」や「痛み」にいたるまで、100%理解することが可能である。これはつまり、他人と自分が、まったく同一の「コード」や「視覚機構」や「痛覚機構」を有しているということであり、とうぜん、「他人」は「自分」とおなじ感情を持ち、おなじ思考をなし、結果的におなじ行動をとるはずだ。だが、そうならば、その「他人」とは、もはや「自分」といってもよかろう。すなわち、この世界は「だれもが自分」という世界なのだ。そして、「だれもが自分」ということは、「自分のみ」の世界と同義にほかならない。(3)のような世界観は、そのような意味において「独我論」なので

ある。

これにたいし、「他人の心のうちは覗きえない」という立場にたてば、つぎのような図式になる。

(4) 独我論B



自分にとって、他人の心のうちは不可視であるが、他人にとって、自分の心のうちもまた見えない。世界は自分のみで完結しており、この世界は、文字どおり「我独り」の小世界の集合ということになる。かくして、(4)の世界観もやはり「独我論」である。

1-3 コミュニケーション・モデルの世界観

ふたつのコミュニケーション・モデルとふたつの独我論モデルを眺めると、(1)と(2)のモデルの背景として、それぞれ(3)と(4)の世界観があるということに気づく。「コード・モデル」は、話し手と聞き手、すなわち「わたし」と「あなた」が、あることばにたいして「まったくおなじ意味をみとめるような同一の内面をもつ」ことを含意するが、それは、「わたし=あなた」という(3)型の独我論につながる。また「推論モデル」は、「わたし」と「あなた」はそれぞれ「わたし世界」「あなた世界」の住人であり、両世界のあいだにアクセス・チャンネルの存在しないことを前提するが、それはとりもなおさず(4)型の独我論世界にほかならない。

(1)(2)のコミュニケーション・モデルが、じつは「独我論的モデル」であるということは、いずれも「私的言語」を構造的に要請するということである。(2)はもちろんのこと、(1)でさえ「他人の心の不透明性」を前提している。なぜなら、(1)の構造において、「コード」を共有しない者——すなわち「他者」——のことばは、まったく理解不能のはずだからだ。そして、私的言語というものが、他人に理解されなくてもかまわない言語である以上²⁾、両モデルとも、「コミュニケーションの不可能性」を含意することになる。だが、これらは、そもそも「コミュニケーションのモデル」ではなかったのか？ じつは、この問にたいする答は、すでにあきらかであろう。しかしながら、われわれは、解答の提示をしばらく保留して、別の角度からこの問題を検討してみたい。

2 認知と社会性

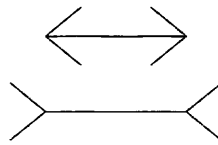
2-1 視覚の独我性

私的言語とは、けっきょく「非社会的」なものであった。だが、このような「自分だけが知っている、他人には知りえないことから」とは、「言語」に限ったものだろうか。たとえば、「ものの姿」はどうであろう。自分の見ている世界と他人の見ている世界は、はたして同じなのだろうか？

われわれの視覚世界が、眼球およびその関連器官から構成される「視点」をもっている以上、同じ位置関係をとらないかぎり、自分の視点と他人の視点は異なることになる。さらに、光線が移ろうことなども考慮にいれるならば、時間も同一でなければならない。三次元空間において、そのような視点をとることが可能であろうか。もちろん、自分と他人が——他人が自分に憑依するなどして——同一人物にならないかぎり、不可能であろう。となれば、たとえば、ならんで立ちながら、暮れなずむ景色をながめて賛嘆の声をあげる自分と他人とは、しかしながら、まったく同じ光景を見ているのではないということになる。それは、微妙に視角の異なった「異なる像」であり、自分の見ている像は「自分だけ」にしか見えていないのだ。

そんなことはあたりまえだ、という人がいるかもしれない。そもそも、われわれの「見ている」ものは、現実世界に存在するものではなく、脳裡に再構成された「表象」なのだ、と。それは、つぎの図形によって示されている。

(5) Müller-Lyer 錯視図形



よく知られているように、この図形の錯視は、上の横線部が下の横線部より短く見えるが、じつは、両者の長さは同じというものだ。つまり、われわれの「内部」にある両者の像は、「外部」におけるのとは異なる姿をしているわけである。そして、「内部」においてどんな姿をしているかは本人にしかわからず、他人には知りえない……³⁾。

これは「私的言語」と同じ構成である。視覚においてすら、われわれの「世界」は異なっており、それぞれの「世界」は、想像（推論）するほかない。だが、本当にそうだろうか。そもそも、われわれはなにを見ているのか？

2-2 認知と相互行為

認知心理学の概説書の教えるところによれば、「視覚」とは、対象の反射した可視光線が、

レンズをとおして網膜上に像をむすび、それを視神経が脳内の視覚情報処理野につたえ、そこにおいて、輪郭検出システムや形態統合システム、色彩判別システムなどの処理をへて、対象の像が脳裡に再現されたものである。たしかに、脳裡に再現されている像は、個人にしかアクセスできないであろう。そしてまた、しばしば実感するように、われわれが見ている像は、写真のように、レンズによって集光された可視光線があらわす像を、缺けることなく再現したものではない。われわれがなにかを「見ている」とき、それは、なんらかの——おそらく脳生理学的な——システムによって選択された像を「見ている」。この点においても、われわれの「見ている世界」は、本人にしか知りえない世界ということになる。

だが、このとき、われわれはほんとうに「見ている」のであろうか？ たとえば、コンピュータを前にして電子メールを打っているとき、われわれはなにを見ているのか。「画面」だろうか？ 「文字」だろうか？ 「文字を形づくるドット」だろうか？ その「全体」なのだろうか？ もし「全体」だとするなら、そのことがどうやって判るのだろうか？ われわれは、メールを打ちながら、いちいち今なにを見ているかを意識しているのだろうか？

おそらく、そうではないだろう。われわれは、たしかに「全体」を「視覚情報」として取り入れているにちがいない。そして、「メールを打つ」という一連の行為を細分化すれば、そのつどつどにおいて、単語を見たり、ひと文字だけを見たり、カーソルを見たり、キーボードを見たりしているはずだ。だが、われわれは、そのいちいちを「～を見ている」とは考えない。(6)にたいする返答として妥当なのは、ふつう(7b)より(7a)のほうであろう。

- (6) — なにしてるの？
 (7) a.— メール打ってるんだよ
 b.— 画面見てるんだよ

もちろん、(7a)より(7b)のほうの方がふさわしいケースもある。たとえば(8)がそうだ。

- (8) — どこ見てるの？
 (9) a.— メール打ってるんだよ
 b.— 画面見てるんだよ

つまり、たとえ光学的・生理学的に「見ている」としても、それは「見ている」ことにはならない。「ことばのレベル」にあらわれてはじめて、「見ている」ことが妥当になるわけである。当然であろう。われわれは、じつにたくさんの行為を同時並行的におこないうるし、実際おこなっているのである。「なにしてんの？」と訊かれて、「息してる」と答えるのは小学生レベルのギャグだが、だからといって、息をしていないわけではないのだ。そして、このことは、「～している」ということば全般にあてはまる。ようするに、われわれの「～している」ということが顕在的になるのは、その行為がもっともpertinent（関与的／妥当的）なばあいであり、それはとりもなおさず、その行為が「話題」になっているばあいなのだ。

たしかに、われわれは、ひとりきりで、鳥のさえずりに耳をそばだてたり、夕景に眼をこらしたりすることができる。そしてそのとき、空気の粗密が波となって鼓膜をふるわせ、それを耳小骨が内耳につたえ、そこで振動が電気インパルスに変換され、ニューロンによって大脳聴覚野につたえられ、「音」として復元される。また、光学刺激は、網膜によって電気インパルスに変換され、大脳視覚野につたえられて、「姿」として復元される。それは、事実であろう。しかしながら、「聞いている」ことや「見ている」ことが問題となる、あるいは「意識」されるときとは、どのようなときか？ おそらく、ひとりきりであっても、そこには「内言」のような「ことば」が介在しているはずである。「ことば」抜きには、当該の行為を「話題」にし、「顕在化」させることは不可能であろう。そして、「ことば」によって顕在化されないかぎり、いくら生理学的に聴覚・視覚が活動しようとも、その状態を「聞いている」「見ている」とは云えないわけである。

例として⑩を見てみよう。

⑩ 会話コーパス *Truc*

- 1 L : Ça c'est une amie qui a, de surcroît n'est pas (Sを見て) une vieille dame (笑) .. (正面を向き) m'a donné ce truc pour coudre les boutons. (Sを見て) Moi je suis 「pas une couturière vraiment affirmée, (正面を向き) et
- 2 S : 「Hmm
- 3 L : je reconnais qu'à la maison en plus je, . quand (Sを見て) les enfants, euh, perdent leurs boutons je leur dis: «Tu les couds toi-même parce que plus tard tu les coudras tout seul, donc c'est pas à moi de les recoudre.»= (正面を向くが、次のSの動作で再びSを見る)
- 4 S : (乗り出して) =Mais je suis rassurée parce que (ペンでLの手元の針をさし) j'aperçois quand même une (Lの顔を見る) aiguille. = (カメラ目線)
- 5 L : =Il 「y a quand même, il y a quand même ... attendez.
- 6 S : 「Ça ne veut pas dire que vous ... vous cousez avec l'allumette.
- 7 L : L'allumette 「n'est pas faite pour coudre directement
- 8 S : 「(笑)
- 9 L : 「le bouton.
- 10 S : 「Ah, d'accord. D'accord.

これはテレビのワイドショーの一コーナーで、Lが「ボタンをつけるのに、マッチ棒を使う」という「ちょっとしたアイディア」を紹介しているところである。司会者であるSはかたわらで聞いているが、4行目で *parce que j'aperçois quand même une aiguille.* (それでも、針が見えたから) と割りこんでいる。たしかに、ここにいたるまで、「マッチ棒でボタンをつける」ということばは現れていたが、「針」ということばは登場していなかった。だが、それまでSはLのほうを見つづけていたし、手元に針があることも——すくなくとも視聴者には——あきらかである。にもかかわらず、Sがここではじめて「針に気づいた」というのはほんとうであろうか。それまでにSは、いったいなにを見ていたというのか？ もちろん針に気づいて

いて、それを黙っていたとも考えられるが、じつは、ここで重要なのは、それまでにSが針を見ていたかどうかということではなく、ここにおいて、「針を見たこと」をコミュニケーションの参加者にあらわなかつた——すなわち「公」——にしたということなのである。もちろん、Sはそれまでに針を見ていたかもしれないし、気づいていなかったかもしれない。だが、そのようなことは、いわば「どうでもよい」⁴⁾。この4行目において、とにかく、Sは——Lの顔でも手元でもボタンでもマッチ棒でもなく——「針」を「見る」という行為をおこなったわけである。

かくして、「見ている」ということは、コミュニケーションという相互行為のなかにおいてしか達成されない。そして、それが相互行為裡にあらわれる現象である以上、「見る」ことは「社会的」なものであり、つねに「公」のものとして顕在化している。すなわち、「私的に見る」ことは不可能であり、「私的視覚」もありえないのだ。

「五感」からの知覚は、われわれが活動しているかぎり不断にインプットされてくる。にもかかわらず、なにを見、なにを聞き、なにを嗅いでいるかといったことはいちいち「意識」されず、いわば「無意識裡に」処理されている。だが、そのようなものは、「見た」り「聞いた」り「嗅いだ」りしたものは——自分自身にとってさえも——みなされない⁵⁾。あくまでも、なんらかのかたちで「言及＝社会的顕在化」されることで、はじめて「～した」ことが成立するのだ。したがって、「○○を見た／聞いた／嗅いだ……」の「○○」の部分は、つねにコミュニケーションの成立後、事後的にあきらかになるわけである。

2-3 「実体」と「虚像」

「私的視覚」は存在しない。「見えている」像は「公」のものであり、つねに、「だれかとのあいだに見えている」。

それでも、と云う人がいるかもしれない。やはり、(5)の「錯覚」における両線分は、「ほんとうは」同じ長さではないか、と。つまり、「公的に」知覚されているのは「虚像」であり、その「見えていない」背後——もしくは別次元——に「真実の像」が存在するというわけである。これは「本質主義」にほかならない。かくして、問題は、公的に顕在化しているもののみが存在するという構築主義か、さまざまなうわべの下に唯一の「実体」substanceが存在するという本質主義かということになる。

3 本質主義とパラメータ

3-1 「真理」の要請

福島(2004a)に論じたように、「交通標識」でさえも、「その場的」に《意味》を獲得する「構築主義的」なものであった。また、上で見たように、「知覚」もまた、「その場的」なもの

と考えられる。にもかかわらず、われわれは、「不変／普遍の真理」を否定しがたい、あるいは、希求する。われわれには、万人が見て万人とも「しかじか」と認めるような「真理」の存在を信ずる心性があるのだ。

たとえば「法律」のような「万人の認める規範」がなければ、社会は混乱に陥るかもしれないし、「文法」がなければ、この文章すら読み解いてもらえまい。だが、法律も文法もリジッドな規範ではなく、人による解釈の差異を容認する。そもそも「規則」というものは、ウィトゲンシュタインが説き明かしたように、当該の規則にしたがうひとひとにとってもア・プリオリに存在するわけではない。「しかじかの規則にしたがっている」ということは、ア・ポストエリオリに確認されるしかない。にもかかわらず、われわれは法律や文法を「規範」と看做し、それにしたがおうとする。なぜだろうか？ やはり「真理」が存在するからではないのか？ だが、「真理」と「構築主義」とは、相容れないものではなかったか？ この間に答えるべく、つぎに「真理」の構造について考察をほどこすことにする。

3-2 「真理」と時空間のパラメータ

「真理」とは、「不変」にして「普遍」なものである。前者は「どんな時間においても妥当する」ということであり、後者は「どんな空間においても妥当する」ということであろう。このことは、「真理」が時空間のパラメータをもたないということをしめしている。たとえば、メンタル・スペース理論によれば、名詞句は「役割」rôleという一種の関数のはたらきをし、そこに時空間やコンテキストのパラメータを代入することで得られる「値」valueをもつことができる。

(11) Le roi est chauve.

(11)における roiは「王さま」という役割を有するが、空間のパラメータを「フランス」に、時間のパラメータを1248年にとれば、「ルイ9世」を値にとりし、時間のパラメータを1682年にとれば「ルイ14世」を値にとる。空間のパラメータを別の国にすれば、もちろん、別の値をとることになる。ところが、(11)が「不変／普遍の真理」となれば、時空間のパラメータをとることができないので、「王さまというものは、いついかなるばあいにおいても、禿である」ということになる。

(11)が「真理」の解釈をもつことにはおおいに違和感があるが、(12)ならばどうであろうか？

(12) La lune tourne autour de la terre.

「月は地球のまわりをまわっている」というのは、時空間を超越した「真理」のように思える。だが、luneの役割を「衛星」、terreのを「大地」とすれば、この文の解釈は「その衛星は、大地のまわりをまわっている」となり、時空間のパラメータをとることが可能になる。メンタル

スペースでは、さらに、「話し手の信念裡の世界」を「スペース」として導入することもあるが、そこであれば、たとえば、「太陽は地球のまわりをまわっている」のような言表も「真理」として言表できる。だが、そのベースとなっている「信念世界」じたいが個人の世界という時空間パラメータを有しているので、その言表の示すところは「普遍」ではなく、したがって「真理」にはなりえない。

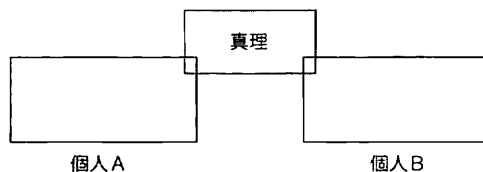
つまるところ、どんな言表も、それ単独では「真理」を表しえない。にもかかわらず、「真理」が感じられるとしたら、それはどんなばあいか？ すでにあきらかであろう。時空間のパラメータをはずすことができないとなれば、逆に、それを条件とすることである。すなわち、「真理」とは、一定の時空間のなかで成立するものなのだ。

3-3 不変／普遍性と時間

だが、そのとき、「真理」の「不変／普遍性」はどうなるのか？ 時空間パラメータに変数が代入されうるならば、たちどころに「不変」でも「普遍」でもなくなってしまい、同時に「真理」ではなくなってしまうのではないのだろうか？ それを解決するために、「時間」という要素について考えてみたい。

そもそも、「真理」には、時空間のパラメータが与えられなかった。それは、「真理」の成立が、「時空間を超越した世界」を対象としているからである。かくして、「真理」は個人を超越したところ、いわばわれわれの「外」にある。にもかかわらず、「真理」は、個々人によって「共有」、すなわち、「承認」され「内」に取りこまれられねばならない。それは、ちょうど(12)のようなものだ。

(13) 「真理」モデル



これが、(1)のコード・モデルを模していることはあきらかであろう。そして、福島(2000)で考察したように、「コード」というものはたしかに存在するが、それは事前^{ア・プリオリ}ではなく、コミュニケーションの成立後、事後^{ア・ポストリオリ}的に見いだされるものであった。となれば、「真理」もまた、同様の構造をもっていると考えられるのではないか。すなわち、「真理」とは「生成」するものであり、とうぜん、そこには「時間」というパラメータが含まれる、と。

議論を単純化するために、ある個人についての「真理」を考えてみよう。「真理」の生成する場はその「個人」であるから、「空間」のパラメータは固定されており、要素として導入せ

ずともよくなり、必要なのは「時間」のパラメータのみとなる。さて、ある個人Aが、たとえば、(14a)を「真理」だと考えていたが、べつのひとびととの対話や、さまざまな知識の導入によって、(14b)に考えをあらためたとする。

- (14) a. 地球はたいらな円盤である
b. 地球はまるい球体である

このとき、「現在」のAにとっての「真理」はもちろん(14b)であるが、(14a)もまた、「過去」のAにとっての「真理」ということができよう。「同時」にふたつの「真理」を持つことはできないが、時間軸をずらせば可能となるのである。

かくして、「真理」に時間パラメータを認めることにより、いくつもの「真理」が存在しうるようになった。Aある時間 t_1 において真理 v_1 を信じていたが、時間 t_2 においては真理 v_2 を信じているのであり、さらに時間 t_3 において真理 v_3 を信ずるかもしれない。あるひとにとって動かしがたい「不変／普遍の真理」——あるいは「本質」——はたしかに存在する。だが、「不変／普遍」であるのは、「そのとき」のみの性質であり、時間（そして空間）が変われば、べつの「真理」にとってかわられることを妨げないのである。「真理」あるいは「本質」といった「唯一の実体」とは、任意の時空間においてのみ「唯一」なのであり、時空間がことなれば、またべつの「実体」が存在しうるわけである。

4 本質主義と構築主義

4-1 「真理」とエントロピー

(14)について、地球上に暮らすわれわれが日常的に感ずるのは(14a)のほうであるが、地球を離れて見れば(14b)が妥当するように、これはけっきょく、「視点」の問題でもある。そして、「真理」は(14b)だからといって、ユークリッド幾何学が無価値になったわけではない⁹⁾。外部とのあいだにエネルギーや物質のやりとりがおこなわれる「開放系」においては、観測、すなわち視点をとるといふふるまいによって、「エントロピー」（乱雑度）が減少し、それに反比例して「情報量」が増大するという法則とパラレルに、「真理」とは、いっしゅの開放系において、ある視点をとることにより産出された「情報構造」だといえよう。外部とのやりとりが小さい「孤立系」ではないとき、エントロピーを系の外に排出することで、情報量が増大し、より決定論的な状態が生成する。いわば「確実度」のたかい世界となるわけであるが、確率がたかいということは「どんなばあいでも」そうなることになるわけであるから、これは「普遍性」のたかいこととおなじであろう。たとえば、左右に並んだ箱のうち、右側の箱にボールのはいっている確率がたかまればたかまるほど、「ボールは右側にはいっているはずだ」となり、ついには「ボールは右側にはいっているものだ」ということが可能になる。これが「本質／真

理」の構成とおなじであることは、いうまでもない。

だが、その開放系がそこに存在する「世界」全体は「孤立系」であり、そこにおけるエントロピーはつねに一定（平衡状態）である。したがって、その世界は非決定論的であり、とうぜん、「本質／真理」のような情報構造は生じない。「本質／真理」がたちあられるのは、ある限定された時空間、すなわち「局所系」においてなのだ。

4-2 「真理」の構築主義的解釈

あるひと（びと）にとっての「不変／普遍の真理」というものは、たしかに存在する。「本質主義」が主張する「本質」の存在は、その点において間違いいではない。だが、それは時空間によって限定されたなかでの「不変」であり「普遍」であった。もちろん、当該のひと（びと）は、その「本質」や「真理」について、時空間がことなれば妥当しないものとは考えないはずである。もしそう考えるならば、その「本質」「真理」は、その瞬間に「本質」「真理」たる資格をうしなってしまうにちがいない。あくまで、その当該の時空間においては、ひと（びと）は、それが永遠不滅の「本質」「真理」であると、いわば「信じこんで」いるのだ。にもかかわらず、それ以外に「本質」「真理」は存在するかもしれない。だが、それがわかるのは、時空間を越えた存在だけなのである⁷⁾。すくなくとも、おなじ時空間を共有するわれわれにとって、「本質」「真理」は「唯一」のものなのである。

しかしながら、われわれは、どのようにして、あることがらを「真理」と考えることができるのであろうか。すでにあきらかであろう。「真理」は、限定された時空間にのみ存在する。言い換えれば、つねにわれわれとともにあるのであり、われわれに先だって存在するわけではない。これは、「視覚像」とおなじ構成であるといえよう。すなわち、われわれにとって「見えている」ものが、われわれの外部にある光学現象や、内部にある脳生理学的反応として存在するのではなく、われわれがそのことを話題にし、それが公のものとなったとき、われわれの「あいだ」にはじめて存在したように、「真理」というものも、それが「社会的に顕在化」したときに、それと認められるのだ。

かくして、「真理」とは、天から与えられたりするものではなく、われわれの相互行為の結果、われわれのあいだに成立するものなのである。すなわち「不変／普遍」の構造とは、構築主義的立場からすれば、すべて、われわれの相互行為のなかで、コミュニケーションが成立した結果、事後的にみいだされるものなのだ。

4-3 規則と真理

ここにおいて、(1)(2)のコミュニケーション・モデルの示すところもあきらかになる。すなわち、(1)における「コード」とは、したがうべき規範とみなされる点において、構造的に「真理」とおなじものであるが、「真理」同様、コミュニケーションに先だって存在するわけではなく、

コミュニケーション後に発見されるものなのであり、したがって、(1)のモデルは、「コミュニケーション成立後」を示すものなのである。いっぽう(2)のモデルは、一見、コミュニケーションが永遠に不成立であることを示すかのように見える。しかしながら、「成功した推論」も、コミュニケーションの成立後に事後的に見いだされるものなのであり⁸¹、したがって、「推論の成立」を前提とする(2)のモデルもまた、「コミュニケーション成立後」の姿を示しているのだといえよう。

ひとたびコミュニケーションが成立しさえすれば、われわれは、いくらでも「文法規則」について語ることができる。そこには、たしかに「文法規則」がある。それは、たとえばフランス語でコミュニケーションをおこなう人間ならば、およそ万人がもちい、万人が従わねばならない「真理」のようなものである。そして「規則」も「真理」も、われわれの外部にア・プリオリに存在しているのではなく、われわれがそのつどそのつどア・ポステリオリに見いだすものなのだ。

5 コミュニケーションの可能性

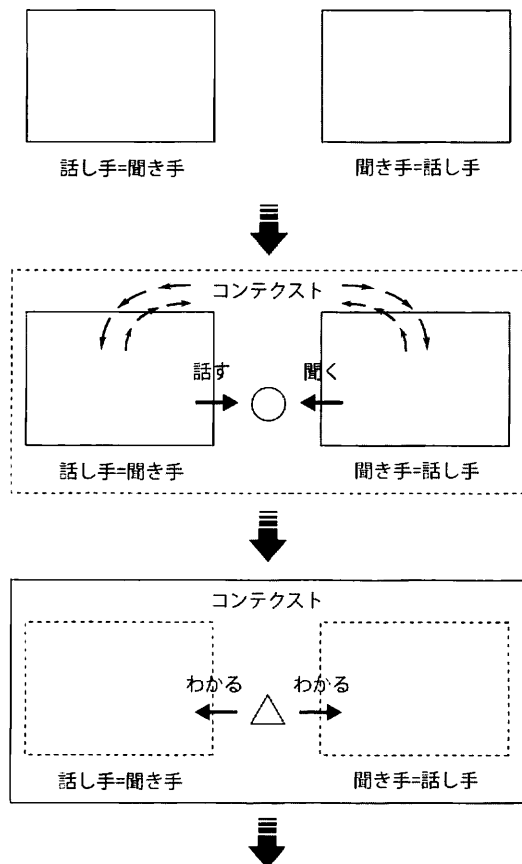
「啓蒙の時代」であるフランス18世紀に、大革命とともに生まれた共和主義は、人間ならばかならずや有している「人権」という「普遍」の概念——文字どおり *res publica*（共通のモノ）——を、世界中に展開することになった。だが、「人権」ということばの、いわば「形態」は「普遍／不変」であっても、その中身、すなわち「定義」あるいは「意味」は、使用者たるわれわれに先だって存在するのではなく、われわれのあいだで決められる——厳密には、使用のたびに確認され、確定される——はずである。ひとたび確認・確定されれば、それを回顧的 *rétrospectivement* に「普遍」とみなすことが可能になる。これこそが「普遍」の構造であった。

われわれは、本小論において、私的言語について考察し、おなじ考えかたが、視覚を代表とする知覚の認知主義に現れていることを見た。すなわち、「他人」にはけっして知りえない「ことば」であり「視覚像」の存在を容認する構成である。しかしながら、いずれも、構築主義的な観点からの再解釈が可能であり、そこにおいては、「社会的に顕在化」せられてはじめて「ことば」や「視覚像」の資格をうるわけであり、「私的」ではありえず、つねに「公的」であった。ついで、「真理」に代表されるような「不変／普遍」とみなされるものも、われわれの存在や社会に先だって存在するかのように見えつつ、じつは社会的に構築されたものであることを論じた。両者の共通点は、いうまでもなく、「われわれのコミュニケーションに先だって存在する」ということであるが、いずれも構築主義的観点から「コミュニケーション成立後に、事後的にみいだされる」ものを「先行する」と、いわば「錯覚」していたことを説明しえた。つまり、「本質主義」は「構築主義的」に説明可能なのであり、その意味において、本質

主義と構築主義は矛盾するものではないといえよう。

最後に、(1)(2)にたいして、構築主義的観点のコミュニケーション・モデルを掲げておこう。

(15) 構築主義的コミュニケーション・モデル



コミュニケーション開始前には、話し手-聞き手に共有のものは存在しない。だが、コミュニケーションが開始され、ことば（○印）が発されると、それをめぐって相互行為が生じ、ことばの《意味》（△印）が析出し、それが両者に共有される。コミュニケーション成立後には、両者には△を解釈するための「共通のコード」——「規則」や「真理」——が認められる。そしてそのとき、話し手と聞き手——「自分」と「他人」——は、同一の世界に属し、いわば「独我論的世界」が構築され、両者は「まったく相互理解」の状態におかれる。つまり、ここでも「時間パラメータ」は必須の要素であり、コミュニケーションは静的ではなく動的にとらえるべきものということをしめしている。コミュニケーションとは、いわば、熱平衡状態、すなわちエントロピー最大という「宇宙の死」へと流されることにあらい、「相互理解」という情報構造の構成へとむかう不断の運動なのである。

【注】

- 0) かつて18世紀の文学と思想についてお教えいただいた小西嘉幸先生に感謝の意をこめつつ。
- 1) じっさいに論じられるコミュニケーション・モデルとしては、コード・モデルに推論をくわえた「修正コード・モデル」がもっともおおく、推論モデルはもっぱら関連性理論の賛同者によって主張される。
- 2) もちろん、「私的言語」は他人に「理解される」こともある。だが、「理解される」ことを目的とした言語ではない。
- 3) 「錯視」はだれにでも生ずるが、その錯覚の「度合い」は、見るひとによって異なるとされている。
- 4) 「非関与的」non-pertinentといってもよいであろう。
- 5) サプリミナル効果のようなものについても同様である。このばあい、「ごく短時間見ていた」ことが事後的にあきらかにされるわけだが、そのためには、サプリミナルな経験をしていたことが社会的に顕在化されなければならない。顕在化がおこなわれなければ、その視覚経験は「無かったこと」にされてしまうであろう。
- 6) アインシュタインの相対性理論とニュートン力学の関係もおなじである。日常レベルでは、ニュートン力学が十分に「真理」とみなしうる。
- 7) われわれの世界が、もじどおり地球規模となった現在においては、「空間」を異にするのみで、べつの「真理」をもつことは難しいかもしれない。したがって、現実には、「時間」のみが「異なり」のためのパラメータとなるであろう。
- 8) たとえば「関連性理論」では、つぎのケースには、「コード」はいっさい存在せず、「推論」のみでコミュニケーションが成立していると説く。

ピーター きょうは気分はどうだい？

メアリー (黙って、アスピリンの壘をバッグから取りだしてみせる)

たしかに、「アスピリンの壘をしめす」=「気分がすぐれない」という「コード」は存在しないにもかかわらず、前者によって後者であることがわかるのは、ピーターが「アスピリンは薬である」「壘を示す行為は、じぶんの発話にたいするリアクションである」等の「推論」をおこなったからであろう。だが、メアリーの行為が、たまたま壘を出したのではなく、ピーターの発話にたいするリアクションであったということは、いかに蓋然性が高くとも、ア・プリオリには決定できない。ピーターの「推論」は「まぐれあたり」だった可能性は排除できないのである。したがって、上のような「推論」の筋道は、コミュニケーションが成立してのち、回顧的に「推測」され探しあてられたものにほかならない。つまり、「推論」といえて、相互行為のなかに埋め込まれており、事前に存在するなにかを「推測」するものではないのである。

【引用・参考文献】

- 上野直樹 1998 見ることのデザイン——知覚の社会—道具的組織化, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房: 204-223.
- 上野直樹・西阪 仰 2000『インタラクション——人工知能と心』大修館書店.
- 金沢 創 1999『他者の心は存在するか——〈他者〉から〈私〉への進化論』金子書房.
- 黒崎 宏 2002『ウィトゲンシュタインと「独我論」』勁草書房.
- 坂原 茂 1990a 同定文・記述文とフランス語のコピュラ文, 『フランス語学研究』24, 日本フランス語学会: 1-13..
- 坂原 茂 1990b 役割, ガ・ハ, ウナギ文, 『認知科学の発展』3, 講談社: 29-66.
- 品川嘉也 1982『意識と脳——精神と物質の科学哲学』紀伊國屋書店.
- 平 英美・中河伸俊 編 2000『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社.
- 永井 均 1995『ウィトゲンシュタイン入門』ちくま新書, 筑摩書房.
- 永井 均 2004『私・今・そして神——開闢の哲学——』講談社現代新書1745, 講談社.
- 西阪 仰 1995 関連性理論の限界, 『言語』24-4, 大修館書店: 64-71.
- 西阪 仰 1996 対話の社会組織, 『言語』25-1, 大修館書店: 40-47.

- 西阪 仰 1997a 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』 認識と文化13, 金子書房.
- 西阪 仰 1997b 間身体的関係のなかの対象, 茂呂雄二 編『対話と知』新曜社: 79-100.
- 西阪 仰 1998 概念分析とエスノメソドロジー——「記憶」の用法, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房: 204-223.
- 西阪 仰 2001 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店.
- 野矢茂樹 1995 『心と他者』勁草書房.
- 野矢茂樹 1999 『哲学・航海日記——言語行為の現象学』春秋社.
- 福島祥行 2000 『意味』の本質と生成過程——相互行為論の観点から——, 『人文研究』52-10, 大阪市立大学文学部: 19-36.
- 福島祥行 2004a 記号・標識・相互行為——構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(1)——, 『人文研究』55-6, 大阪市立大学文学研究科: 9-21.
- 福島祥行 2004b 冠詞・指示・知識——相互知識のパラドクスと相互行為——, 『森本英夫先生古希記念『周辺』『TLLMF』合併号』, シメール社: 61-74.
- 福島祥行 2004-5 こぼれる気持ちと伝わることば, 1-12, 『ふらんす』白水社.
- BURR, Vivien 1995 『社会的構築主義への招待——言説分析とは何か』[田中一彦] 川島書店.
- GIBSON, James Jerome 1979 『生態学的視覚論』[古崎 敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬 旻] サイエンス社.
- JAKOBSON, Roman 1960 Linguistique et poétique, dans *Essais de linguistique générale*, coll. "double", Éditions de Minuit, 1981.
- MOESCHLER, Jacques & REBOUL Anne 1994 *Dictionnaire encyclopédique de pragmatique*, Seuil.
- TRAVERSO, Véronique 1999 *L'Analyse des conversations*, coll.128, Nathan.
- WITTGENSTEIN, Ludwig 1953 『哲学探究』 ウィトゲンシュタイン全集 8 [藤本隆志], 大修館書店, 1976.
- WITTGENSTEIN, Ludwig 1953 *Tractatus logico-philosophicus suivi de Investigations philosophiques*, [Pierre KLOSSOWSKI], tel, Gallimard, 1961/1986.

【2005年9月26日受付, 10月14日受理】

Construction du solipsisme et de l'universalité -Un essai d'étude constructionniste de la communication (2)-

FUKUSHIMA Yoshiyuki

Résumé : Presque tous les modèles de la communication, supposant qu'il existe un stade du «pré-langage» (langage inactualisé) auquel l'énonciateur seul a accès avant que la communication ne commence, proposent des systèmes qui y font accéder aussi le co-énonciateur. Ce pré-langage serait une sorte de langage intime antérieur à l'interaction sociale, que personne d'autre que l'énonciateur ne peut connaître. Or, admettre l'existence d'un langage intime, c'est tomber dans l'essentialisme. Le constructionnisme refuse l'essentialisme, ne reconnaissant ni l'existence d'un avant de la communication c'est-à-dire de l'interaction sociale, ni d'un universalisme postulant un être «a-spatio-temporel». Mais nous sentons toutefois qu'il y a une «vérité universelle». C'est pourquoi, dans ce petit essai, nous nous proposons, sans contradiction à notre avis, d'analyser cette «vérité universelle» d'un point de vue constructionniste, en introduisant le paramètre spatio-temporel. Nous proposons de plus aussi un modèle constructionniste et dynamique de la communication prenant en compte le paramètre temps.